

令和5年度

あくとみ まち や い せき

芥見町屋遺跡現地見学会

令和5年11月25日(土) 13:30～

岐阜県文化財保護センター



6・7地点全景(南から)



8地点全景(北西から)



平成28年国土地理院発行の2万5千分1電子地形図「岐阜北部」を使用

●調査データ

所在地：岐阜県岐阜市祇園地内

調査面積：6,697.1㎡
(累計10,373.9㎡)

事業者：国土交通省中部地方整備局
岐阜国道事務所

事業名：国道156号岐阜東B P建設事業

調査期間：令和5年5月9日～令和6年1月上旬

●調査の成果

芥見町屋遺跡は、岐阜市東部、長良川左岸の自然堤防上に立地する遺跡です。昭和47年の岐阜県教育委員会による調査では、今年度の発掘区に近接した場所で弥生時代末～古墳時代初め頃のしぜんていぼう 縦穴建物が5軒確認されています。平成22年の当センターによる調査では、今回の発掘区から北西に約700m離れた長良川堤防沿いで、鎌倉時代から近代にかけての建物跡、溝、井戸、土坑などが見つかり、現代の地割が中世にまでさかのぼる可能性が示されました。

国道156号岐阜東B P建設事業に伴う調査は、今回で3年目です。今年度の調査は、令和3年度に1地点で確認した①弥生時代末～古墳時代初め頃及び古代の集落がどのように広がっているか、②近世の郡上街道跡が南にも残っているのかを調べることを主な課題として開始しました。その結果①については、集落域の南端を確認するとともにこれまで確認できていなかった地形の変化と集落域の関係に関する知見を得ることができました。また②については、道路の規模や構造が明らかになるとともに、旧地割から復元できる道筋どおりの位置・形状であったことが確認できました。また、弥生土器すえきや須恵器など、累計22万点以上の遺物が出土しました。



①縄文時代晩期の土器棺墓



②土坑から出土した弥生時代の壺



③中央に炉をもつ堅穴建物



④堅穴建物から出土した土師器甕



⑤土坑から出土した平安時代の碗



⑥中世の方形土坑群

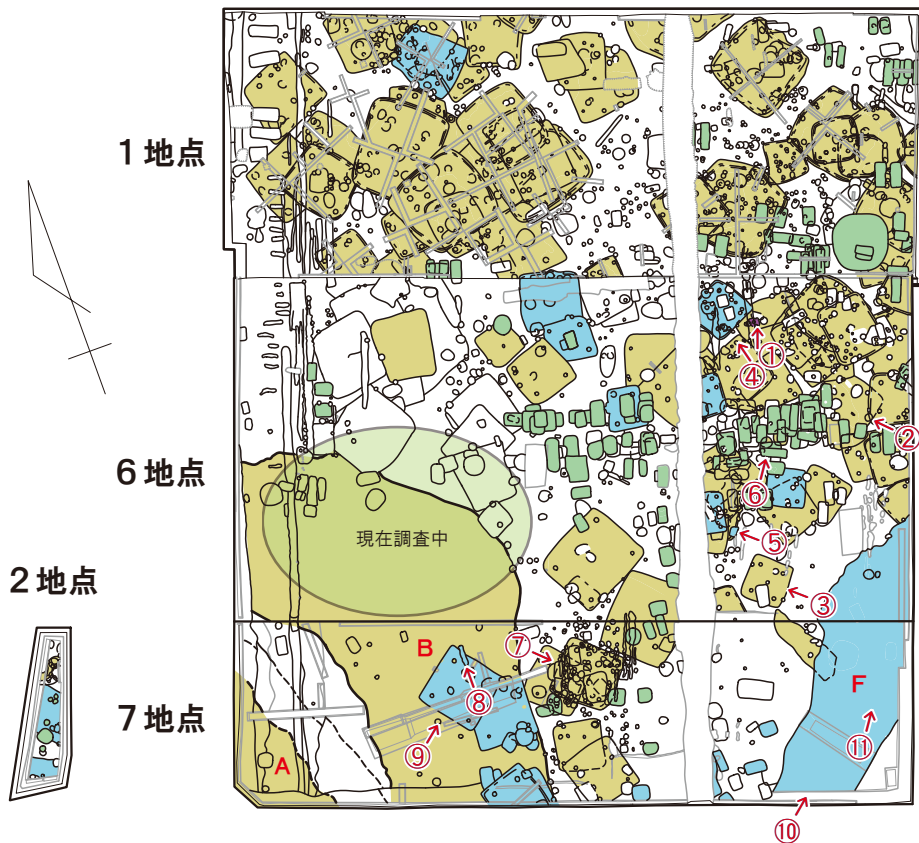
● 6・7地点の成果 ※以下、令和5年10月現在の成果に基づくため今後の調査で変更される場合があります。

【縄文時代】 今回の調査で6地点から晩期の土器棺墓を1基確認しました。この遺構は、煮炊き使用する土器を棺に転用して死産児や小児を葬ったものであることが想定されます。これまで芥見町屋遺跡でみつかった遺構の中で、最も古い時代の遺構として注目されます。

【弥生時代～古墳時代】 この時期の遺構・遺物は主に弥生時代後期～古墳時代前期前半に属します。この時期の遺構には堅穴建物や土坑があり、集落が継続して営まれたと考えられます。堅穴建物は、1地点では21軒見つかっており、これに隣接する6地点で30軒以上、7地点で4軒確認しました。堅穴建物は、平面が方形で一辺の規模は4～5m程度のものが多く、床面中央に川原石を備えた炉をもつものも認められます。なお、6・7地点の南西部は旧河道（A・B）であり、最終的には古代以前に埋没したと考えられます。

【古代】 この時期の遺構・遺物は奈良時代から平安時代（8世紀後半～9世紀前半）のものが中心と考えられます。この時期の遺構は堅穴建物が主ですが、6・7地点南東部では大溝（F）も確認しました。大溝は幅が4～6mあり、8地点の中央付近で屈曲して南東へ向かいます。元々は河道であった可能性もありますが、何度も掘り直した跡などがあり水路として人為的な管理が行われていたことが推測されます。この大溝から東の山田川に向かって地形が下がるため、大溝が古代集落域の境となっていた可能性があります。大溝の底面付近からは多量の須恵器を中心とした遺物が出土しており、摩耗していないことや出土範囲が堅穴建物に隣接する範囲に限られることから、人為的に投棄された可能性が高いと考えられます。これらの須恵器の中には円面硯や風字硯、香炉又は盤の獸脚など、一般的な集落では出土しないものが含まれており注目されます。なお、6地点では10世紀以降の灰釉陶器も一定数出土しており、当該期まで集落が存在していた可能性があります。

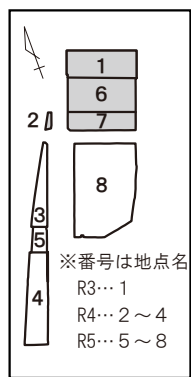
【中世以降】 この時期の遺構・遺物は、鎌倉時代（13世紀頃）のものが中心と考えられますが、弥生時代～古代に比べ遺物の量は少なくなります。室町時代中頃（15世紀）以降の出土遺物はほぼなくなることから、この頃以降当該地は畑などの耕作地になったと考えられます。



⑦弥生時代終末期の堅穴建物



⑧土坑から出土した遺物



- 縄文時代晩期
- 弥生時代後期～古墳時代初頭
- 古代
- 中世

色々な時代のものが重なって見つかるから調査が大変なんだ。



⑨古代の堅穴建物



⑩古代の大溝 (F)

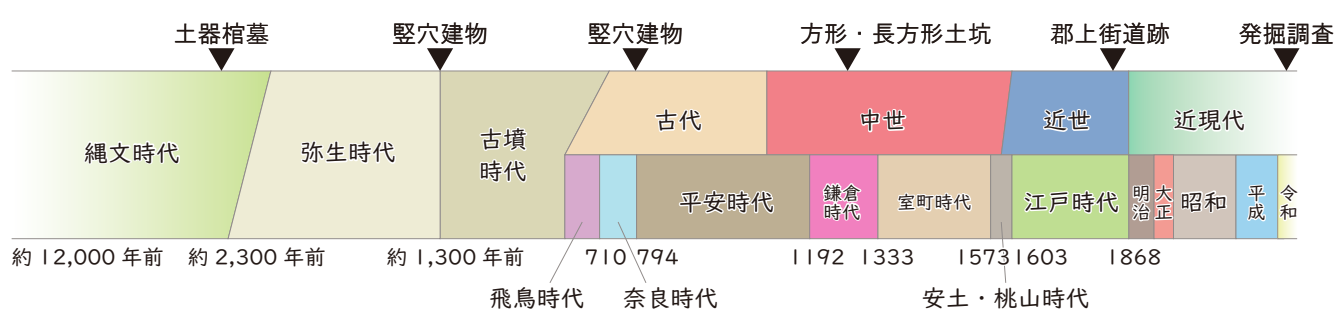


⑪大溝 (F) 出土の須恵器の瓶類

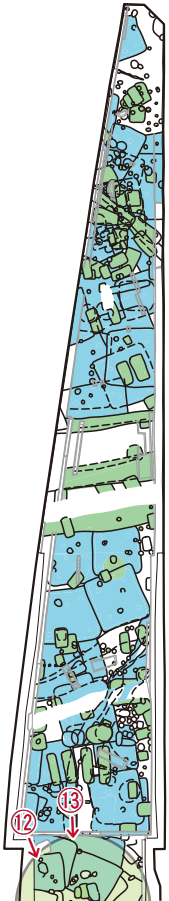


古代の遺構から出土した須恵器の碗

芥見町屋遺跡と年表 ※遺構は主なもの

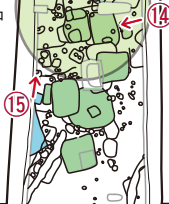


3 地点



現在調査中

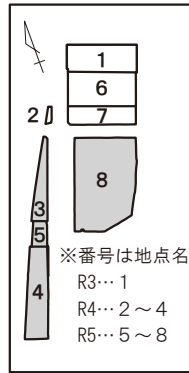
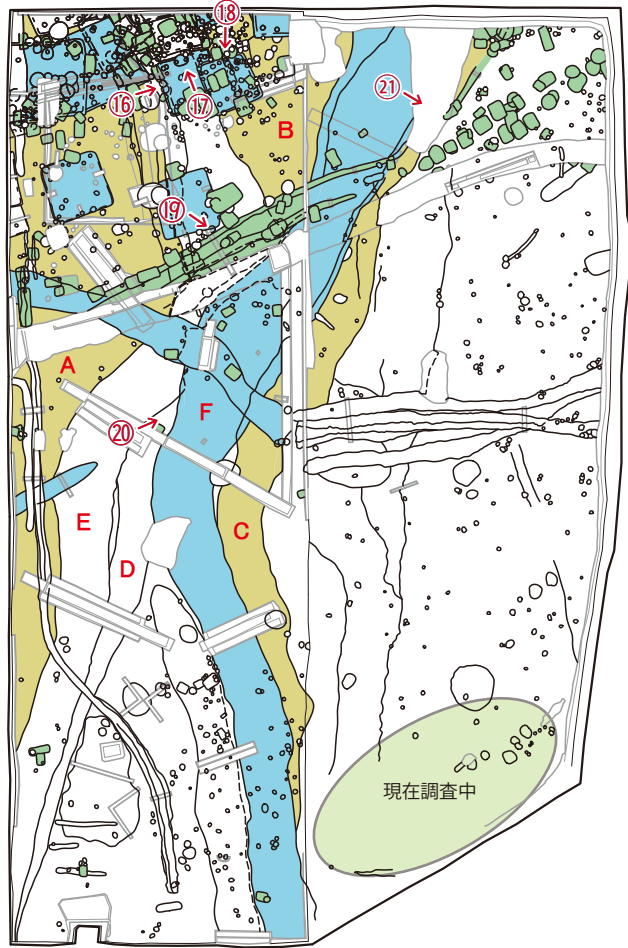
5 地点



4 地点



8 地点



縄文時代晩期



弥生時代後期～
古墳時代初頭



古代



中世



⑫土器焼成土坑



⑬古代の堅穴建物から出土した土馬



⑭中世の方形土坑



⑮土坑から出土した土師器皿



⑯堅穴建物床面から出土した須恵器



⑰堅穴建物のカマド



⑱古代の堅穴建物



⑲土坑から出土した土師器こしき甕



⑳古代の大溝（F）



㉑中世の方形土坑群

● 8 地点の成果

【縄文時代】発掘区西部は複数の河道によって旧地形が失われており、当時期の遺構は確認できませんでした。東部は当時の山田川（長良川の後背地）に向かって低くなる地形で、人々の活動はなかったと考えられます。

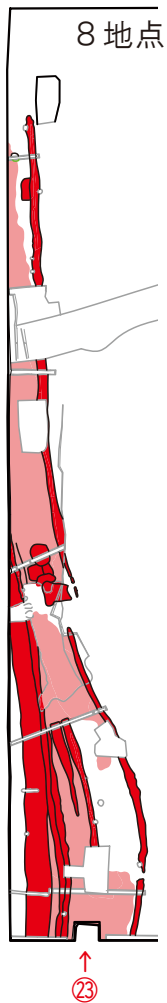
【弥生時代～古墳時代】6・7地点南西部で確認した旧河道（A・B）（谷状地形）を発掘区北部及び西部で確認しました。この内Aの南側は古墳時代前期以降の旧河道（D・E）によって削平されていました。Aは、3・4地点には存在しないことがわかっており、現在の市道芥見岩田線に沿って流れていたと推測されます。旧河道の内、時期のわかる遺物としては弥生時代末～古墳時代初め頃までのものがあり、その後複数の旧河道（D・E等）が発掘区南西に向かって流れていましたが、遺物をほとんど含まず、古代に至るまでは周辺で人々の活動がなかったと推測されます。

【古代】この時期の遺構・遺物は6・7地点と同様に奈良時代から平安時代（8世紀後半～9世紀前半）のものが中心と考えられます。遺構としては、発掘区北部で8軒の堅穴建物を確認しました。この内の1軒で、カマド周辺の床面上からほぼ完形の須恵器が散在する状況で出土しました。この中には特殊な器種である鉄鉢てつぱつ3点が含まれており、何らかの祭祀行為があったと考えられます。6・7地点から続く大溝（F）は8地点の南端まで約100m続いており、そのまま山田川に合流していたと推定されます。若しくはこの大溝が山田川の前身となる流路であったかもしれません。先述した大溝内の多量の須恵器は堅穴建物がない南部では少量しか認められませんでした。

【中世以降】北部を中心に方形・長方形の土坑を確認しました。その他、中世以降と考えられる溝を複数確認しましたが現時点で性格は不明です。8地点は他の地点と比べ地形が低くなっており、中世以降は耕作地として利用された範囲が多かったと考えられます。

● 5 地点の成果

昨年度調査した3・4地点に挟まれる範囲で、古代・中世の遺構を確認しました。古代の遺構には、奈良時代の堅穴建物、土器焼成遺構及び溝状遺構があり中世の遺構には、鎌倉時代の掘立柱建物や大型の方形土坑群などがあります。



郡上街道跡の遺構

0m 20m

●郡上街道跡の調査

現在の市道芥見岩田線は、白山信仰の参詣道として知られる郡上街道の推定ルートとされています。今回の調査では、1地点から南へ向かって続く街道の遺構を比較的良好な状態で確認することができました。当時の街道は6・7地点では現在の市道と並行していましたが、8地点から南北方向に近い向きとなり南部で西に向かって屈曲していたようです。

今回確認した遺構は、①道路両脇の側溝、②路盤と考えられる礫敷、③路盤下の波板状凹凸面、④補修坑の可能性のある方形土坑があります。①は道路を区画するために設置された溝と考えられますが、排水機能の有無は不明です。側溝の間隔から道路幅は10尺(約3m)を目途に整備されたと考えられます。②は6～8地点で確認しました。道路全面に敷設されていた可能性が高いと思われます。③は6・7地点で確認しました。道路に直行する方向で細長い溝状の土坑が一定間隔で並んでいました。その性格は諸説(路床の改良など)あります。④は1地点と6地点で確認した遺構で、方形の形状と直径5cm程度の締め固めた^{あえんれき}亜円礫で埋め戻されていること、側溝の間に設置されることを特徴とします。埋土の状況から路面の部分的な補修に伴うものと考えられます。なお、これらの土坑の出土遺物から、幕末頃に補修されたと推定されます。



㉒ 7地点の道路状遺構



㉓ 8地点の道路状遺構

●宇野隆夫帝塚山大学客員教授による調査成果の評価に関するコメント

長良川の自然堤防上に立地する当遺跡の営みが縄文時代晩期にまでさかのぼることが確認された。この頃の集落は低地に広まる傾向があり、この地域の成り立ちを考える上で重要な成果といえる。当該地は中世の川湊や近世の街道が所在するなど古くから交通の要衝であったと考えられ、弥生時代から古代の集落の成立もこのことを背景としていた可能性がある。遺物では古代の硯が注目される。官衙的な建物は見つからないが、これまで確認された遺構や出土遺物から考えると一般の農民集落とは考えられない。郷長クラスの在地有力者が活動していたと考えたい。縄文時代から近世の各時代において特徴的な遺構・遺物が確認されており、今後の詳細な分析・検討が期待される。